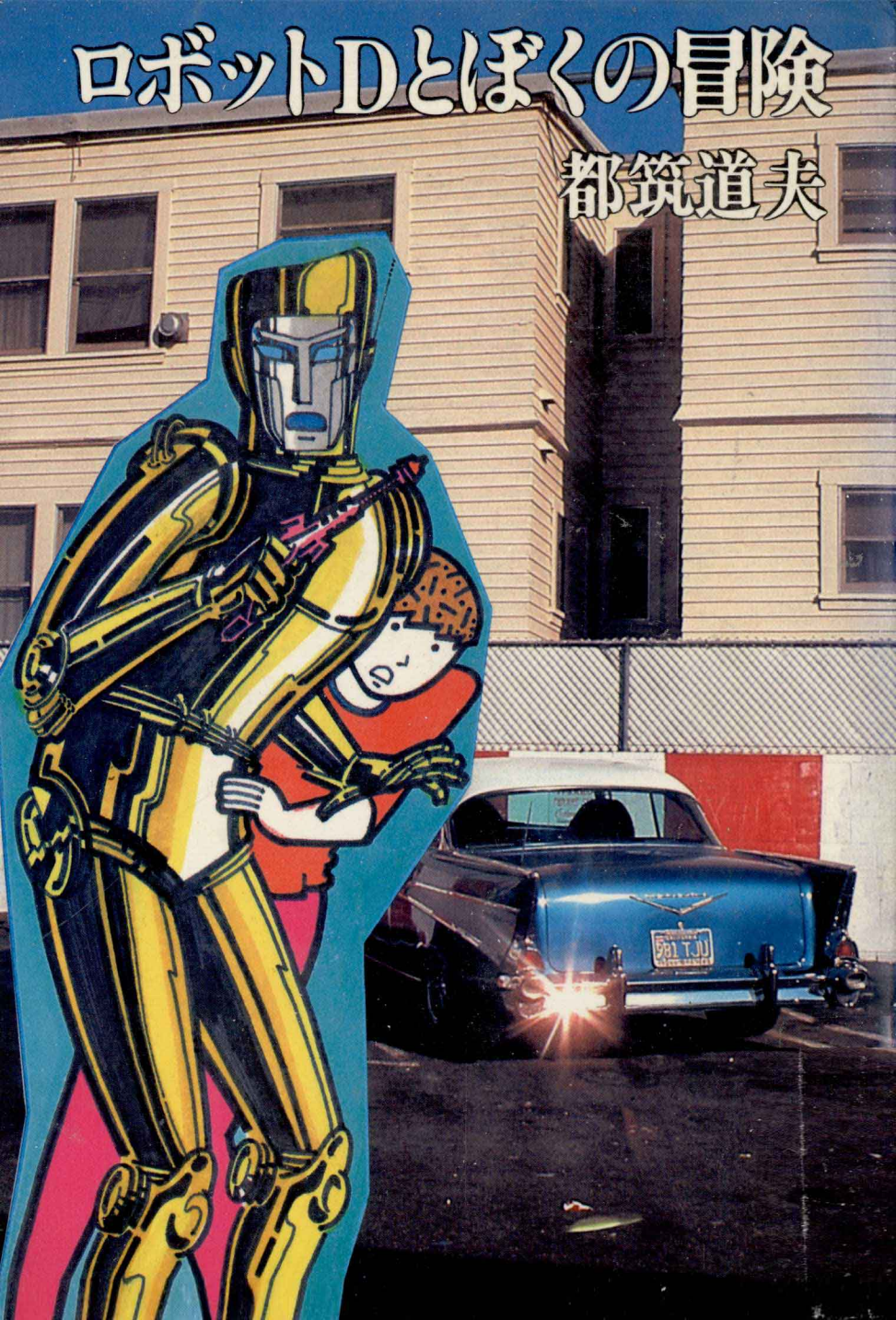
ロボットDとぼくの冒険

都筑道夫



〈検印省略〉

ロボットDとぼくの冒険　定価八八〇円

著者　都筑道夫

昭和五十六年八月五日　印刷

昭和五十六年八月十日　発行

発行者　矢貴東司

印刷所　大文堂印刷株式会社

製本所　越後堂製本

発行所　東京都中央区日本橋蛎殻町二丁目

七番十号　株式会社　桃源社

電話　（六六六）四〇〇一番（代表）

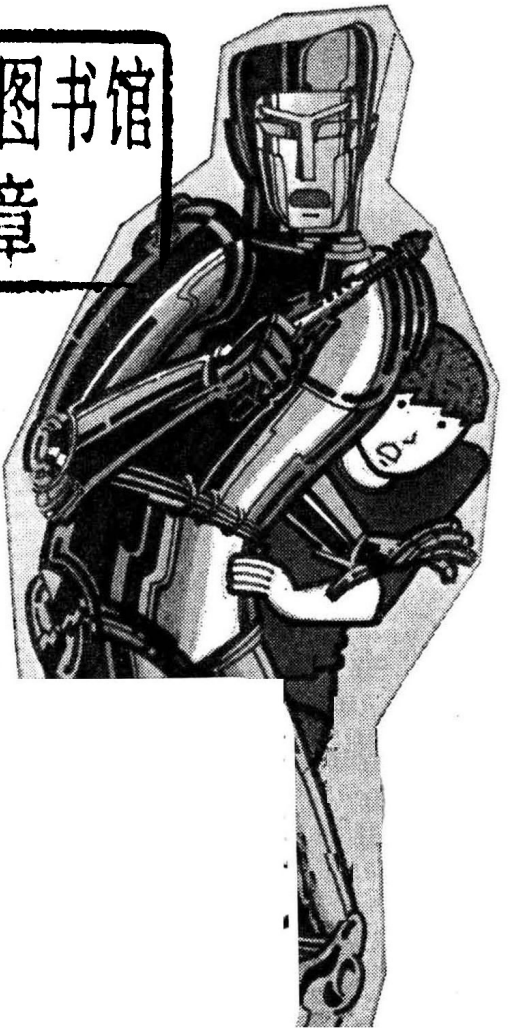
(分)0093 (製)181011 (出)5180

1981©

ロボットDとぼくの冒険

都筑道夫

工业学院图书馆
藏书章



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目録

ロボットDとぼくの冒険……9
ゼロ博士のサーカス／くらやみ実験室／地底の神殿
赤い花こわい／びんの中のぼく／時間の罠
死体はなぜ歩いたか……153
月に帰った男……175
ふたりの陽子……193
消えた文字の秘密……211
隣の誘拐事件……229
殺人迷路……249

装釘・松岡康二

ロボットDとぼくの冒険

ロボットDとぼくの冒険

ゼロ博士のサーカス

1

遅刻しそうになって、懸命に走ってきてみると、学校がなくなっていた。校舎がないのだ。校門もない。夢ではなかった。ぼくの息は、はずんでいた。足も痛かった。かばんをさげた手の甲を、左手でつねってみたら、やはり痛かった。夢ではない。わが城西学苑高等学校は、この地上から、消えているのだった。

ぼくはかならずしも、勉強がきらい、というわけじゃない。頭脳明晰、成績優秀というわけでもないのに、かなり名の通った城西学苑に入れたことでも、勉強にはげんだ事実は、みとめていただけるだろう。それなのに一瞬、これは願望の結果なのじゃないか、と思った。無意識に、高校なんかなくなっちまえばいい、と思ったのが、実現したのではないか。そう考えたのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けれども、ぼくはそんな超能力の持ちぬしではない。目をつぶって、またひらいてみたが、やっぱり学校はなくなっていた。四階建ての校舎があったところには、銀色のドームみたいなものが、日の光にかがやいている。みたいなもの、といったのは、どっしりした半球形を、それが備えてはいなかったからだ。妙にいびつで、ふわふわした感じがする。

まわりの地面には、短い草が青あおとしげっていて、人のすがたはどこにもなかった。ぼくはどうしたら、いいのだろう。心細くなって、ドームに近づいていくと、人間がひとり出てきた。どこから出てきたのか、よくわからなかったが、だれだかはすぐにわかった。スタイルのいい女性で、クラスメートの飯野由美だった。それほど親しくはないのだけれど、ぼくのほうは、親しくなりたいと思っている。

ドームから出てきたのが、飯野由美だとわかったとたん、なんだ、これは夢なんだ、と思った。ぼくは健康な男の子だから、セクシーな夢を見ることはある。これは、まさにセクシーな夢だった。飯野君は裸ではなかったが、裸に近い恰好だった。たしかレオタードといったと思う。バレーの稽古なんかするときに、着るやつだ。パール・ピンクとでもいうのか、つやつや光る薄紅いレオタードを着ただけの恰好で、踊るように足どりも軽く、飯野由美は近づいてくる。

どきどきしながら、ぼくも近づいて、声をかけようとすると、飯野君はにっこり笑った。お化粧をして、つけ睫毛をつけている。夢でなかったら、飯野君の両親は、学校に呼びだされるだろう。とにかく、ぼくは声をかけた。

「きょうは学校のほうが、遅刻したのかい」

気のきいたジョークのつもりだったが、飯野君はとんちんかんな返事をした。
「まだ準備中なのよ。はじまるのは、午後から。ぜひ見にきてくださいね」
「見にくるって、なにを？」
「わたしたちをよ。ポスターをご覧になって、様子を見にいらしたんでしょう？　割引券をあげましょうか。あなた、学生さんね。ずる休みしたんじゃ、ないのかな。いまじぶんに、こんなところをうろうろしていて」
「学校がないんだから、しかたがないさ。ここはなんなの？」
「わからないで、いらしたの。きょうから始まる大サーカスじゃない。わたし、猛獣つかいのユミ。どうぞ、よろしく」
「知ってるよ、飯野由美君」
「あら、わたしの本名、どうして知っているの？」
「ぼくが、仲瀬良一だからさ。きみが猛獣つかいなら、ぼくは空中ぶらんこの名人でも、いいはずだがな。ピエロだなんて、いわないでくれよ」
ぼくが笑いかけると、由美は妙な顔をしながら、
「仲瀬さん？　思い出せないけれど、どこかでお目にかかったかしら」
「毎日、お目にかかっているじゃないか」
「なにかの間違いでしょう？　じきにここにトラックが来るのよ、猛獣の」
「ほんとうかい？」

「だから、出ていってくれない。サーカスが始まるのは、午後からなのよ。トラックが来ると、あぶないわ。早く帰ってください」
「待ってくれよ、飯野君」
あわてて、ぼくが呼びとめたのに、飯野由美は身をひるがえすと、ドームのなかに走りこんだ。ぽかんとして、ぼくは見送っていたが、いっこうに目はさめない。ドームに近づいてみると、どこにもドアはなかった。さわってみると、ドームの壁は固くなかった。ぶよぶよして、綿かなにかの入ったビニールみたいだった。
どうなっているんだろう。夢ではない。セクシーな夢どころか、これは悪夢のような現実だった。ぼくは異様なドームに背をむけると、もう一度、走りだした。あきれたことに、道路もなくなっていた。短い草のはえた原っぱが、どこまでもつづいていた。ぼくが乗ってきたバスの停留所も、なくなっていた。停留所の前のパン屋も、なくなっていた。まわりに家は、一軒もなかった。遠くに家らしいものが、積木細工みたいに見えるだけだった。

2

やっと家のならんだところへ来て、ぼくは最初のドアをたたいた。見たところ、お店は一軒もない。ものすごくモダンな住宅街、という感じだったから、とにかくドアをたたいて、住んでいるひとに、ここがどこなのか、聞いてみようとしたのだ。たたいたのは、ブザーらしいものが、どこにも見えなかったからだ。

だが、返事はなかった。次の家も、返事がなかった。家はあっても、だれも住んでいないのだろうか。道ばたに、公衆電話があった。ぼくは小銭入れをとりだして、かばんを足もとにおくと、受話器を外そうとした。だが、受話器は外れない。よく見ると、小銭を入れる穴もなかった。

「なにをしているんですか、きみは」

「うちへ電話をかけようと思っ――」

といいながら、ふりかえって、ぼくは言葉をのみこんだ。うしろに立っていたのは、おかしな人物だった。人物といっていいかどうか、ぼくは直感的に、これはロボットだな、と思った。しかし、あまりロボットらしくはない。人間らしくもない。人間とロボットの中間みたいだから、サイボーグなのだろうか。背が高くて、ひょろっとしたからだつきは、あまり強化されているようには見えないし、だらんと垂れた棒みたいな長い手は、間がぬけて見えた。ただし、顔だけは利口そうだった。もっとも、その顔は、不規則な円筒形のなかに、はめこまれていて、借りもののように見えた。その顔は、

「カードはどうしました?」

といって、親切そうに微笑した。ぼくはこの人間だか、ロボットだか、サイボーグだか、なんだかわからない人物に、たよってみるより、しようがなかった。

「電話をかけるのに、カードがいるんですか。いったい、ここはどこなんです?」

「東京の杉並区ですよ」

「バスの停留所は、どこにあるんでしょう」

「バス? 停留所? なんのことですか、それは」

「この通りには、バスが通っていたんです。城西学苑高等学校というのが、きのうまではあったんですよ。ところが、きょう来てみたら、学校がなくなっていて、そこにあるのは、サーカスだっていうんです」
「ああ、原っぱにサーカスが来ていますね。きのうから、テントが張ってありました」
「そんなばかな——きのうはあすこに、学校があったんです。銀いろのドームなんか、ありゃしなかった。こんな積木みたいな家もなかった。こんな変な公衆電話もなかった。あんたのようなロボットもいなかった。飯野君も猛獣つかいなんかじゃなかった」
「わたしは一種のロボットですが、その飯野君というのは……」
「クラスメートの女の子です。それが、レオタードなんか着ちゃって、つけ睫毛なんかつけて……」
ぼくはたぶん、赤くなったんだろう。一種のロボットは、また微笑して、
「猛獣つかいだ、といったんですか」
そのとたん、ロボットのわきで、四角いものが動いた。金属性の箱のようなものが、そこにおいてあるのは、気がついていた。一辺が三十センチメートルぐらいの立方体、というのが、いちばん正確だろう。箱にしては、蓋のつぎ目らしいものが、見えなかった。それが、ふわふわと宙に浮いたのだ。四角いものは、きらきら光りながら、ロボットの右肩のへんまであがって、ゆっくり背中のほうへまわっていった。
ぼくはもう、なにが起こっても、おどろかないことにした。いまにぼくの頭のてっぺんから、足が一本はえてくるかも知れない。そうなっても、おどろいたり、あわてたりしないで、はえてきた足を

どうつかうか、考えることにしよう。そう思っても、きらきら光る箱が、ロボットのうしろをまわって、左肩のところに現れると、目を離さずにいられなかった。四角いものは、だんだん光らなくなってきて、ゆっくり地面におりていった。

「飯野さんが猛獣つかいになっていたほかに、知っていた人に会いませんでしたか」

と、ロボットが聞いた。ぼくが首をふると、ロボットはつづけて、

「バスに乗っていたときには、いつもと変わりがなかったんですね」

「なんだ。バスを知っているんじゃあ、ありませんか」

「わかったんです。見たことは、ありませんが……」

「とにかくバスのなかは、いつもと同じでしたよ。おりたら、変なことになっていたんです」

「あなたの名前は?」

「仲瀬良一。でも、落ち着かないな。ぼくは高校生ですよ。あんまり、ていねいな口をきかないでくださいよ」

「じゃあ、きみ、と呼ぶことにしよう。いっしょに来ないか、仲瀬君。どうやら、きみは別の世界から、ここへ迷いこんで来たらしいよ」

3

「きみの高校のある東京の杉並区と、この東京の杉並区とは、違うんだ。日本はひとつだけじゃない。日本も、アメリカも、フランスも、ソビエトも、三つあるかも知れないし、四つあるかも知れない。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com